

【合同資源みらい賞】

おく ひろし
奥津 博士

かあさんへ

古希を迎えた私が改めて母に呼びかけをするとしたら、おふくろ、かあさん、いつものようにはあちゃんかな。でも今日は長く呼び慣れた「かあさん」にします。

小学校の卒業式で、親に感謝の言葉を伝える代表に選ばれ先生に下書きを見せると「苦労したお母さんのことをもっと書きなさい。」と言われ「嫌です。」と断った。担任の言う事では「ごめんね、ちゃんと治してあげられなくて。」とかあさんは自分を責めるのが分かっていたから。何も悪くないかあさんの悲しむ顔は見たくなかった。

3歳のときにポリオと診断され「良くて全身マヒの後遺症。悪くすると5歳までは生きられない。」と宣告されていたこと。

当時の小児マヒ治療は、ルンバールという薬を脊髄の骨と骨の間に注射する壮絶なもので泣き叫ぶ我が子を見て「もうやめてください。」と治療を諦めた親がいた中、かあさんは泣きながら私を押さえつけて治療を続けたと私達を知る老医師から聞きました。

おかげで私の障がいは、右下肢に補装具を着けるだけで歩ける体を取り返すことが出来ました。

かあさんは小さい頃に私を背負って病院通いをしたせいもあり、膝腰を痛め85歳を過ぎると寝たきりになりましたが、鬼籍に入る前日にも

「ひろし。今日は足、冷たくないかい。」と最後まで心配をしていましたね。

小さなころから何度も伝えたかった

「僕の足が不自由なのは、かあさんのせいではないよ。」を感謝の言葉とします。

本当に長い間ありがとうございました。

博士

(北海道/70歳/男性/無職)

片通話となってしまった母親と、ゆっくり話をするつもりで書きました。